

# 横浜国大学生におけるスポーツ・スタイル についての調査研究

伊藤信之\*・後藤由紀子\*\*・梅沢佳子\*\*\*・斉藤隆志\*\*\*\*

An investigation on the sport styles of the students  
in Yokohama National University

Nobuyuki ITO, Yukiko GOTO, Yoshiko UMEZAWA and Takashi SAITO

## はじめに

人生 80 年時代を迎え、全生活時間の中で自由時間の占める割合が増大している今日、生涯にわたる学習の必要性は一層高まるであろうし、その中でもスポーツは今や人々の余暇生活の核になりつつある。また、大学における体育の授業は高等学校から社会人に継続する運動の場の一部であり、組織的な運動を行える最後の場である。生涯スポーツにつながる運動の生活化を目指す上で、学生のスポーツに対する思考様式および行動様式を理解することは、非常に重要な課題であると考えられる。

大学生がスポーツ活動に対してどのような見方、関わり方をしているかといった問題にアプローチしている研究はこれまでも多くあった。田崎ら<sup>1)</sup>は、学生を宇土の運動生活の 8 類型<sup>2)</sup>によって分類し、類型ごとに体育やスポーツに関する意識・行動の特徴を素描した。それは、クラブに所属しているのか(クラブ運動者)、競技会や学内スポーツ大会などの運動プログラムに参加しているのか(プログラム運動者)、グラウンドや体育館などのスポーツ施設を個人的に使って運動をしているのか(エリア運動者)といったこれら 3 項目の質問への組み合わせによって学生を 8 類型に分類したものである。しかし、山川ら<sup>3)</sup>は、クラブ運動者が実質的なクラブ運動者と形式的なクラブ運動者によって構成されており、両者のスポーツに対する意識・態度に違いがみられることを明らかにしている。クラブに参加はしているが、そのスポーツに対しては初級者のレベルである者もいるであろうし、逆にクラブやサークルには所属していないが、中・上級レベルの技能を身につけ習慣的にスポーツに取り組んでいる者も当然存在することが考えられる。斉藤らは、参加者のスポーツ種目に対するニーズを無関心から動機づけをしている段階までを 3 段階に、さらに活動のレベルを 3 段階設定し、これら 2 つを接合させてスポーツ選好度としてい

\* 保健体育教室

\*\* 聖心女子大学

\*\*\* 湘南国際女子短期大学

\*\*\*\* 筑波大学

る<sup>3)</sup>。本研究では、スポーツに対する実際の活動のレベルに着目し、学生を分類することを試みた。

本研究の目的は、スポーツの活動レベルによって学生をいくつかのグループに分類し、学生のスポーツの生活様式としてのスポーツ・スタイルの特徴を明らかにすることである。

## 研究方法

### 1. データの収集

#### (1) 調査票の作成

本稿では、本学学生のスポーツの生活様式としてのスポーツ・スタイルを AIO (Activities, Interests and Opinions statement) と呼ばれる一連の変数群によって測定することを試みた。この AIO による測定のアプローチは、主に北米のマーケティング研究者らによって提唱されてきたもので、現在のライフスタイル研究では、最も頻繁に使われている<sup>5)</sup>。これは、ライフスタイルを日々の活動(activities)、周囲の事物についての関心(interests)、および社会的、個人的諸問題についての意見(opinions)という三つの次元からとらえようとするものであるが、本稿では先行研究<sup>1,6)</sup>によって得られた項目をもとに 37 項目からなる AIO 変数を作成した。

さらに、学生のスポーツに対する思考様式や行動様式を「スポーツを行う動機」「スポーツの効果」「スポーツ活動選好」から捉えた。

#### (2) 調査方法

調査は、本学保健体育理論 I 及び II 受講生を対象に、留置法によって実施した。調査実施時期は 1992 年 1 月であった。有効回収標本数は 426 であった。調査対象の概要として性別、学年、学部のごとの分布を表 1 に示す。

		度数	%
N=426			
【性別】	男性	327	76.8%
	女性	99	23.2%
【学年】	1年	300	70.4%
	2年	103	24.2%
	3年	19	4.5%
	4年	4	0.9%
【学部】	工学	72	16.9%
	経営学部	172	40.4%
	経済学部	86	20.2%
	教育学部	96	22.5%

表1 調査対象者のプロフィール

## 2. データの分析

### (1) スポーツスタイルの変数の数量化

AIO 測定値の数量化にあたっては、「よくあてはまる」、「まああてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4段階評価順にそれぞれ4, 3, 2, 1の点を与え、間隔尺度を構成するものと仮定した。AIO データからのスポーツ・スタイル因子の抽出には主因子法を用い、バリマックス直行回転を行った。

### (2) スポーツ活動選好による学生の分類

普段なじみ深くかつ学生の関心が高いと思われるスポーツ46種目を選択し、これらのスポーツ種目に対するニーズのレベルを無関心から動機づけされている状態まで「関心がない」「関心はあるが、まだやってみようとは思わない」「きっかけがあれば一度やってみみたい」の3段階に設定し、さらに活動のレベルを「初級レベル」「中・上級レベル」の2段階に設定し、これら2つの過程を接合させた5段階評価をスポーツ選好度とした。本稿では、活動のレベルに着目し、「中・上級レベル」で関わっているスポーツ種目のある者とそうでない者とを分け、男子で「中・上級レベル」種目のあるグループをMA群、女子ではFA群とし、それ以外をそれぞれMB群、FB群とした。

グループ間の各変数の差異の検定には必要に応じてカイ自乗検定、T検定を用いた。

## 結果と考察

### 1. スポーツ・スタイル因子の抽出

37のAIO項目に対する因子分析の結果、固有値1.0以上の因子が7個得られたが、個々の項目をみると、回答が肯定的あるいは否定的な方向へ極端に偏ったものや、性差の著しいものがかなり含まれていることがわかった。そこで29項目からなる新しい尺度を構成し、再び因子分析を行った結果6個の因子が抽出された。表2-1, 2は29項目による因子分析の結果を示している。

第1因子は、ゲーム(試合)で実際に身体を動かすとともに、その勝敗にもこだわるといふ傾向が強いことを示すため「競技性」の因子と名づけられた。第2因子は、スポーツが日常の中で習慣的に行われており、それがなくてはならないものとなっていることを示す因子で、「生活化」の因子と考えることが出来る。第3因子は、スポーツを健康や体力の維持・増進をはかるために行うとともに、それが精神修養にも役立つことを示している。また、「きちんとした指導者について基本からじっくり習いたい」という項目も含まれていることから「自己向上」の因子と名づけられた。第4因子は、ウェアや用具のファッション性やブランド性にこだわるとともに、流行のスポーツに敏感であることを示すことから「ファッション」の因子と名づけられた。第5因子は、勝敗うんぬんよりも、その場の雰囲気を楽しめればよいという傾向が強いことを示すため「気晴らし」の因子と名づけられた。第6因子は、そこに含まれる2項目がスポーツを1種目に限定するのではなく、幅広く行っていくということを示しているため「多種目志向」の因子と名づけられた。

表2-1 29項目による因子分析の結果  
(回転前の固有値, 寄与率, 累積寄与率)

因子	固有値	寄与率 (%)	累積寄与率 (%)
1	7.92	27.3	27.3
2	2.57	8.9	36.2
3	2.00	6.9	43.1
4	1.69	5.8	48.9
5	1.19	4.1	53.0
6	1.10	3.8	56.8
7	0.96	3.3	60.1
8	0.90	3.1	63.2
9	0.82	2.8	66.1
10	0.75	2.6	68.7
11	0.73	2.5	71.2
12	0.71	2.5	73.6
13	0.68	2.4	76.0
14	0.64	2.2	78.2
15	0.60	2.1	80.3
16	0.58	2.0	82.3
17	0.55	1.9	84.2
18	0.52	1.8	86.0
19	0.49	1.7	87.7
20	0.46	1.6	89.2
21	0.45	1.6	90.8
22	0.41	1.4	92.2
23	0.40	1.4	93.6
24	0.36	1.2	94.8
25	0.35	1.2	96.0
26	0.34	1.2	97.2
27	0.29	1.0	98.2
28	0.27	0.9	99.1
29	0.25	0.9	100.0

## 2. 活動レベルの違いが思考様式, 行動様式に及ぼす影響

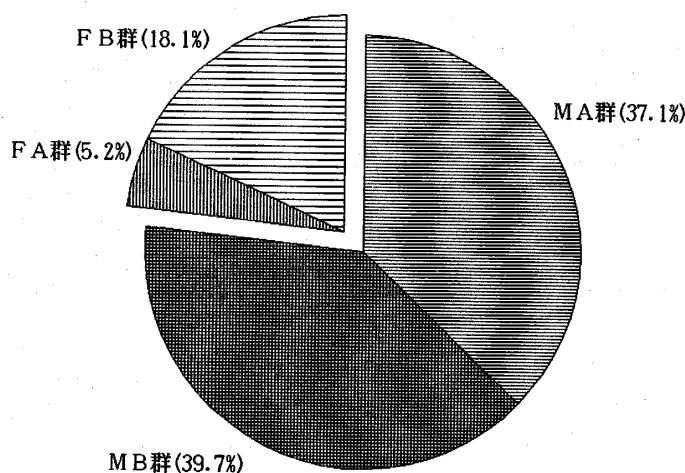
### (1) スポーツ活動選好による学生の分類

本稿では, 活動レベルの違いと性別に着目して学生を4つのグループに分類した。図1に各グループの構成比を示した。男子では中・上級レベルで行っている種目がある者(MA群)が男子全体の約半数を占めるのに対して, 女子ではその割合が4分の1以下となっている。男子に比べて女子では中・上級レベルで行うスポーツを持つ者が非常に少ないといえる。大学入学前にこれだけの差が男女に存在するとは考えづらいので, 本学の女

子学生は、大学入学後にそれまで行っていたスポーツを止めてしまうケースが多いのではないかと考えられる。

表2-2 29項目による因子分析の結果  
(回転後の因子負荷量, 共通性, 寄与率, 累積寄与率)

	因子I	因子II	因子III	因子IV	因子V	因子VI	共通性
人と競い合うのは気が進まない	-.777	-.031	-.055	-.073	.136	.080	.637
スポーツはゲーム(試合)をすることが楽しい	.707	-.046	-.024	.058	.180	.078	.544
スポーツに苦手意識をもっている	-.671	-.353	.048	-.013	.110	-.176	.621
スポーツは見て楽しむだけでなく、実際にやってみたい	.623	.347	.243	.048	.188	.177	.636
自分の記録や試合の勝敗にはこだわる方	.610	.021	.211	.257	-.243	-.261	.610
スポーツを行っているときの経つのも忘れる方	.578	.381	.207	.035	.145	.171	.574
何か新しいスポーツを始めてみても長続きしない	-.496	-.400	-.071	.097	.039	.155	.446
スポーツでは激しく身体を動かしたい	.495	.371	.375	-.035	-.107	-.013	.536
上達するためには、多少つらい練習でも辛抱する	.471	.371	.430	.114	-.178	-.239	.646
スポーツなどしなくても特別不自由は感じない	-.210	-.631	-.238	-.067	-.050	.025	.506
スポーツをすることが日常生活の習慣になっている	.113	.614	.336	.195	-.176	.097	.581
スポーツ用品店(売り場)をしばしばのぞく	.127	.566	.119	.473	.104	-.029	.586
人に誘われないとスポーツはしない方	-.497	-.549	-.143	-.067	.162	-.125	.616
スポーツにはお金をおしまない	.152	.540	.132	.365	.158	-.067	.495
スポーツの専門雑誌をよく読む	.233	.486	.144	.334	-.231	-.069	.481
良い環境の中でスポーツをするためなら遠くまで出かけていきたい	-.019	.462	.139	.280	.368	-.171	.476
自分にとってスポーツは精神修養に役立つと思う	.035	.153	.775	.018	.035	-.023	.628
健康の維持・増進をはかるためにスポーツを行っている	-.002	.163	.759	.062	.030	.123	.622
自己の体力を高めることに興味がある	.298	.204	.684	.063	-.063	.020	.606
きちんとした指導者について基本からじっくり習いたい	.091	.106	.610	.238	.013	-.230	.501
ウェアや用具のファッション性やブランド性にはこだわる方だ	-.016	-.004	.033	.811	.081	-.010	.666
一流選手の使っているスポーツウェア、用品等に興味がある	.058	.175	.042	.770	-.103	.043	.641
どおせやるならウェアや用具はしっかりしたものをそろえたい	.067	.261	.154	.683	-.063	-.034	.568
新しく紹介されたり、流行しているスポーツに興味を持つ方である	.050	.127	.054	.434	.183	.400	.404
スポーツは、へたでも楽しめれば良い	-.046	.117	-.112	-.252	.640	.066	.506
スポーツの合間や前後(アウタースキー等)を楽しむのが好き	.127	.009	.211	.283	.591	-.032	.491
スポーツはあくまでも気晴らしの一部として楽しむ	-.181	-.346	-.126	.034	.572	.187	.532
いろいろなスポーツを幅広く楽しむ方である	.390	.062	.091	.063	.147	.732	.726
一つのスポーツに熱中する方である	.306	.273	.217	.105	.097	-.601	.596
寄与率	7.3	8.9	6.9	5.8	4.1	3.8	
累積寄与率	27.3	36.2	43.1	48.9	53.0	56.8	



MA群: 男子で中・上級レベルで行うスポーツを持つグループ (N=158)  
 MB群: 男子で中・上級レベルで行うスポーツを持たないグループ (N=169)  
 FA群: 女子で中・上級レベルで行うスポーツを持つグループ (N=22)  
 FB群: 女子で中・上級レベルで行うスポーツを持たないグループ (N=77)

図1 各グループの構成比

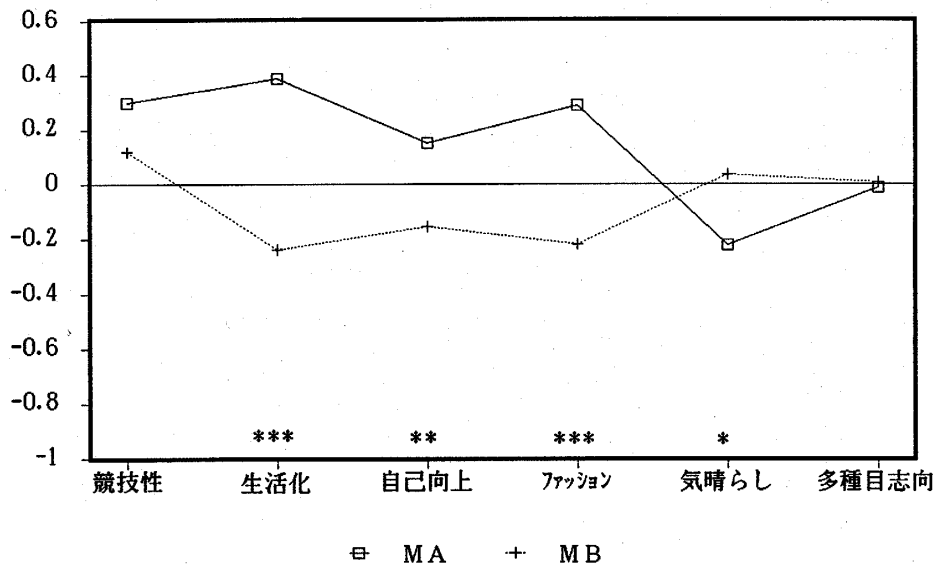
## (2) スポーツ・スタイル因子との関連

図2はスポーツ・スタイル因子得点の各グループ別比較である。男子では「生活化」, 「自己向上」, 「ファッション」の3つの因子でMA群の平均因子得点が有意にMB群を上回った。また「競技性」でも統計的に有意な差ではなかったが, MA群がMB群を上回る傾向にあった。「気晴らし」では逆にMB群の値がMA群のものを上回った。

MA群はスポーツが生活の中にしっかりと根付いているとともに, ウェアや用具等にもこだわりをみせることがわかる。また, スポーツを単なる気晴らしとは考えていないということが読み取れる。MB群は積極的にスポーツに関わるという点ではMA群に劣るが, ゲームの勝敗を競うという点ではさほど差がないことがわかる。また気楽にスポーツを楽しみたいという気持ちがMA群よりも強くなっている。MB群ではゲームで競うのは楽しいが, 本格的に行おうという意欲は低いことがうかがえる。

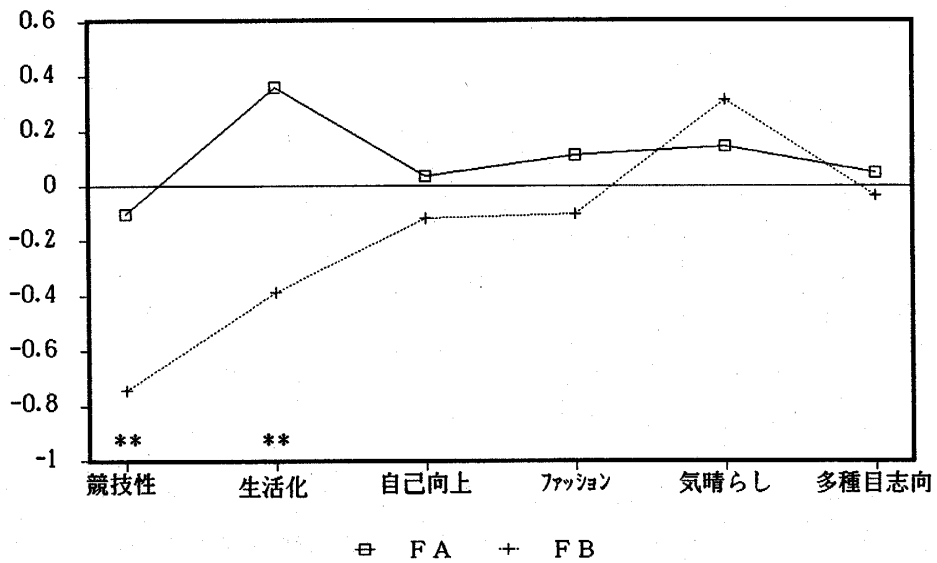
女子では, 「競技性」, 「生活化」の因子でFA群のスコアがFB群のものを有意に上回った。「自己向上」と「ファッション」の因子でも, FA群のスコアの方が高いという結果を示しているが, 有意な差ではなく男子ほどの違いは見せなかった。FA群では, スポーツが生活の中に密接に関わってはいるが, 男子に比べ試合等の勝敗にはあまりこだわりをみせないことが読み取れる。

男子と女子とを比較すると, 女子ではFA群でも「競技性」の平均因子得点は負の値を示し, 「気晴らし」の女子2グループの因子得点は, 正の値を示していることから, 男子に比べ女子は勝敗を競うことを敬遠し, そのスポーツを行っている時の雰囲気や空気に楽しみを見いだすという傾向が強いことがうかがえる。またそれはFB群で顕著である。



t検定：\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05

図2-1 因子得点に比較 (MA VS. MB)



t検定：\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05

図2-2 因子得点の比較 (FA VS. FB)

(3) スポーツ活動選好

本調査では、学生のスポーツ活動の現状をとらえるために、46のスポーツ種目についてその活動選好度を調べた。46種目のスポーツ活動全体に対する積極性を測る目安として、各グループ別に活動率、希望率、関心率をまとめたものが表3である。例えばMA

群では、その活動率が30%を超えているのは6種目あり、20%第も6種目、10%台が10種目、10%未満が24種目あり、活動率の延べ%が631.0%ということになる。ここでの活動率は初級レベルと中・上級レベル双方の活動率を合わせたものであり、希望率は「機会があればすぐにでもやってみたい」と回答した割合を、関心率は「関心はあるがまだやってみようとは思わない」と答えた割合を示す。

表3 各グループの活動率, 希望率, 関心率

		MA	MB	FA	FB
活 動 率	延べ%	631.0%	356.5%	545.5%	339.5%
	～ 9.9% 種	24	33	29	35
	10.0% ～ 目	10	9	8	8
	20.0% ～ 数	6	1	4	0
	30.0% ～	6	3	5	3
希 望 率	延べ%	1429.8%	1433.9%	1359.3%	1136.5%
	～ 9.9%	3	5	3	7
	10.0% ～ 種	7	6	8	10
	20.0% ～ 目	9	9	13	12
	30.0% ～ 数	18	13	10	11
	40.0% ～	9	13	12	6
関 心 率	延べ%	912.9%	994.6%	871.0%	970.4%
	～ 9.9%	2	3	10	1
	10.0% ～ 種	22	20	17	24
	20.0% ～ 目	19	20	14	13
	30.0% ～ 数	2	1	2	6
	40.0% ～	1	2	3	2

男女とも関心率では、MB, FB群がMA, FA群をわずかに上回っているが、活動率ではMA, FA群がMB, FB群を大幅に上回った。また活動種目数をみると、10%未満の種目数はMB, FB両群の方が多いのに対して30%以上の種目数はMA, FA両群の方が多かった。中・上級レベルのスポーツを持っているグループは、スポーツの実際の活動も活発であるとともに、自分の得意な1種目以外にも幅広いスポーツ活動を行っているといえる。

一方、希望率の延べ%をみると、男子では両群の差がほとんどないのに対して、女子では約200%の差があった。一般的な女子学生は、新たにスポーツを始めてみようという意欲が、男子に比べて小さいことがうかがえる。

次に視点を変えて、各グループごとに活動率の上位10種目をリストアップしてみた



(表4)。活動率では、どのグループでもそのベスト3は「ボウリング」「スキー」「テニス」となっている。特にボウリングはどのグループでも活動率が6割を超えており、学生に非常に親しまれているスポーツであることがうかがえる。

FB群では「ボウリング」「スキー」「テニス」のベスト3とそれ以降のスポーツとの活動率の差が大きく、活動率が20～40%台の種目が1種目もなかった。大学生になって行われるスポーツが一極集中化する傾向があるといえる。このことはまた、本学の一般女子学生が、大学に入学してからそれまで行っていたスポーツを止めてしまうのではないかということの一つの裏付けとして考えることが出来る。

表4 活動率の上位10種目の各グループごとの比較

	MA		MB		FA		FB	
1	ボウリング	72.4%	ボウリング	66.7%	ボウリング	72.7%	ボウリング	63.2%
2	スキー	51.3%	スキー	36.7%	スキー	68.2%	テニス	53.9%
3	テニス	48.7%	テニス	35.8%	テニス	63.6%	スキー	50.0%
4	サッカー	40.4%	ソフトボール	20.9%	バドミントン	42.9%	バドミントン	18.4%
5	野球	37.8%	野球	18.8%	水泳	31.8%	スケート	18.4%
6	ソフトボール	37.4%	サッカー	17.5%	卓球	28.6%	水泳	18.4%
7	水泳	27.6%	卓球	16.4%	スケート	23.8%	バレー	18.4%
8	ジョギング	24.5%	バレー	14.5%	バレー	23.8%	卓球	14.5%
9	バレー	23.7%	バドミントン	14.1%	ジョギング	20.0%	ソフトボール	13.2%
10	卓球	23.4%	スケート	12.9%	バスケット	19.0%	サイクリング	13.2%

(4) スポーツを始めた動機

表5は、大学生になってからスポーツを行った理由21項目のうち、全体平均で挙げた上位の10項目を各グループごとに示したものである。

スポーツを行う動機としては「楽しそうだから、面白そうだったから」、「好きだから」という理由を支持する割合が高く、運動不足やストレス解消のため、健康のためといったものを大きく上回った。学生は、スポーツを健康の維持やストレス解消のための手段としてというよりも、スポーツ自体の持つ楽しさ面白さに魅力を感じていることがうかがえる。

全体平均で1位となった項目（「楽しそうだったから、面白そうだったから」）では、男女とも、中・上級レベルで行うスポーツを持つグループとそうでないグループとの差は、ほとんどなかったが、第2位の項目（「好きだから」）では、男女ともそれぞれMA、FA群がMB、FB群を有意に上回った。

中・上級レベルで行うスポーツを持つグループ（MA、FA群）は、そうでないグループ（MB、FB群）に比べて、そのスポーツの持つ「楽しそう」、「面白そう」といったイメージに惹かれるだけでなく、実際の楽しさをより深く認識しているといえる。このこと

はまた、より高度な技術や能力を身につけることで、スポーツを行う楽しみがさらに増す可能性があることを示唆していると考えられる。

表5 大学生になってスポーツを始めた理由－上位10項目

	全体	MA	MB	FA	FB
1 楽しそうだったから、面白そうだったから	58.5%	59.5%	51.5%	72.7%	67.5%
2 好きだから	56.8%	69.0%	48.5% ***	72.7%	45.5% *
3 運動不足解消のため	39.7%	35.4%	42.0%	50.0%	40.3%
4 気晴らし、ストレス解消のため	34.0%	31.0%	36.1%	36.4%	35.1%
5 家族や友人とのコミュニケーションのため	30.8%	29.1%	27.8%	18.2%	44.2% *
6 以前からやっていたから	24.4%	36.1%	16.6% **	50.0%	10.4% ***
7 健康のため	23.7%	26.6%	21.9%	31.8%	19.5%
8 筋力増強のため	12.7%	20.9%	11.2% *	4.5%	1.3%
9 カッコよかったから	12.2%	15.8%	8.9%	9.1%	13.0%
10 上達するプロセスを楽しみたかったから	8.9%	15.2%	4.7% **	13.6%	3.9%

$\chi^2$ : \*\*\*P <.001 \*\*P <.01 \*P <.05

#### (5) スポーツの効果

表6は、これまでにスポーツを行って感じたことについて、21の項目を用意して測定した結果、全体平均で上位10項目に挙げたものを各グループ別に示したものである。

全体平均で1位となった項目（「運動不足が解消できた」）では、男女とも両群間に差がほとんど見られなかった。また「ストレスが解消できた」という項目も同様に、全体のパーセンテージとしては高いが、男女とも両群間に有意な差は見られなかった。しかし、「新しい仲間ができた」、「友人、恋人等との友情、愛情が深まった」では、中・上級のスポーツを持つグループがそうでないグループを上回り、男子では有意な差がみられた。

スポーツでさわやかに汗をかき、ストレスを解消するというレベルでは群差はなく、中・上級レベルでスポーツに関わることは、交友関係を豊かにするという点でより影響を及ぼすといえる。

興味深いことは、「うまくできないでつまらない思いをした」、「他人と比較されて劣等感を味わった」、「失敗して自身をなくした」といったスポーツに対して否定的な内容を問う項目においては、男子ではMA群の方がMB群よりも有意に大きな値を示しているのに対して、女子ではそれが逆転しFB群の方が高い値を示し、特に「うまくできないでつまらない思いをした」ではFA群の約2倍の値を示しているということである。本学の

一般女子学生は過去にスポーツで傷ついた経験を多く有しているといったことが考えられる。

表6 スポーツを行って感じたこと—上位10項目

	全体	MA	MB	FA	FB
1 運動不足が解消できた	72.8%	73.4%	69.8%	77.3%	76.6%
2 新しい仲間ができた	72.5%	84.2%	62.1% ***	86.4%	67.5%
3 ストレスが解消できた	63.1%	63.3%	61.5%	72.7%	63.6%
4 体力, 筋力等が増強できた	60.8%	70.3%	59.8% *	50.0%	46.8%
5 友人, 恋人等との友情, 愛情が深まった	39.7%	44.3%	29.6% **	63.6%	45.5%
6 精神的に強くなった	36.6%	44.3%	33.1% *	27.3%	31.2%
7 うまくできないでつまらない思いをした	32.6%	31.0%	20.7% *	36.4%	61.0% *
8 ケガや病気をした	28.4%	34.8%	23.1% *	27.3%	27.3%
9 他人と比較され劣等感を味わった	25.8%	26.6%	17.2% *	31.8%	41.6%
10 失敗して自信をなくした	17.8%	21.5%	11.8% *	13.6%	24.7%

$\chi^2$  : \*\*\*P <.001 \*\*P <.01 \*P <.05

## ま と め

本研究では、学生のスポーツの生活様式としてのスポーツ・ライフの因子分析から、「競技性」「生活化」「自己向上」「ファッション」「気晴らし」「多種目志向」の6つの因子が抽出された。またスポーツへの活動レベルの違いと性別とから全体が大きく4つのグループに分類され、各グループごとにスポーツ・スタイルの違いがみられた。

中・上級レベルで行っているスポーツを持つ男子学生は、スポーツが日常生活に密接に関わっており、活動種目数も豊富である。またウェアや用器具等もしっかりしたものを使うという傾向があり、スポーツを単なる気晴らしとしては考えていない。中・上級レベルのスポーツを持つ女子学生は、スポーツが生活の中にとけ込んではいないが、男子に比べ試合等の勝敗には、あまりこだわらない傾向を示した。

中・上級レベルのスポーツを持たない男子学生は、ゲームをするのは楽しいが、日常的に本腰を入れてスポーツに取り組むということはあまりなく、自己の体力を高めるということへの関心も低い。中・上級レベルのスポーツを持たない女子学生は、スポーツはあくまでも気晴らしとして行い、試合等に本格的に取り組むことには抵抗を持っている。それは過去にスポーツでネガティブな経験を持つ者が多いことが関係していると思われる。

また、中・上級レベルのスポーツを持つ学生は、そうでない学生にくらべて、スポーツの楽しみをより深く認識している傾向があり、スポーツを通じて人間関係が豊かになったとする者が多かった。

## 文 献

- 1) 伊藤信之他, 「筑波大学の価値類型とその特徴に関する調査研究」, 大学体育研究, 第13号, 15-34頁, 1991
- 2) 宇土正彦, 『体育管理学』(改訂版), 133頁, 大修館書店, 1983
- 3) 斉藤隆志他, 「筑波大学生のスポーツ活動選好の類似性によるスポーツの分類」, 大学体育研究, 第13号, 57-84頁, 1991
- 4) 田崎健太郎他, 「運動生活の類型と階層的把握」, 大学体育研究, 第4号, 142~152頁, 1982
- 5) 原田宗彦・菊地秀夫, 「スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究」, 体育学研究, 第35巻, 第3号, 241-252頁, 1990
- 6) 『第1回ミズノスポーツライフ調査』, ミズノ株式会社, 1991
- 7) 山川岩之助他, 「筑波大学生の運動生活に関する調査」, 大学体育研究, 第6号, 63-104頁, 1984